

崇城大院生

シャッターに力作

地域と大学 美術で交流

今にも道路に飛び出しそうなバイク、背景には金峰山が描かれている。縦約3尺、横16尺、島崎2丁目の通称・島崎本通りに面した「ウイング・ナカヤマ」のシャッターです。見事な出来栄えに道行く人たちが立ち止まります。

描いたのは崇城大芸術学部的大学生だった富永健斗さん(24)と杉本祐太さん(24)。制作を依頼したのはウイング・ナカヤマの中山秀之さん(42)。同店オリジナルのカスタムバイクをPRする絵をシャッターに描きたいと、昨年10月、大学に相談しました。はぐくまれた「智」を地域社会に還元することを掲げる同大の地域共創センターが窓口になり、シャッター絵の制作が動き始めまし



シャッターをキャンバスに作品を描く富永健斗さん(手前)と杉本祐太さん(2月撮影)



カスタムバイク・通称「マチカブ」を前にしたウイング・ナカヤマの皆さん。右から2人目が中山秀之さん

た。

当時、卒業制作に取り組んでいた2人でしたが、「学ぶことが多いの

では」と挑戦することに。2人は中山さんと打ち合わせを重ね、11月末にデザインを練り上げて12月から制作をスタートしました。しかし温かいアトリエとは違い、屋外での制作は苦勞の連続。寒さに加え、シャッターと向き合うのは店が閉まる午後8時から。使用する画材も異なり、悩ませました。完成したのは2月末。制作に約100時間、打ち合わせを含めれば120時間ほどかかりました。

2人を指導した芸術学部の勝野真言教授は「いろいろな制約があつてたいへんだっただと思います。色彩や親しみやすさ、地域の特徴なども取り入れたいという2人の思いもあつて、苦勞したのではないでしょう。しかし今回の体験を通して、2人は工夫して対処していく力を身に付けることができたはず」と語っています。

中山さんは「力作を描いてもらい感謝しています。シャッターの絵が呼び水になって、まちおこしにつながってほしい」と話しています。